

歩き始めの子供の靴着用実態と足部形状(第3報)その後1年間の成長量と足部形状の分類
 甲南女大短大 木岡悦子 広島大教育 古田幸子 甲南女大短大○森 由紀
 京都文教短大 菊藤 法 広島大教育 鈴木明子 熊本大教育 高森 壽
 広島文化女短大 谷山和美

目的 前回の発表では、歩き始めの乳幼児207名における足長、足幅などの足部項目および身長、体重を1年間4回にわたり計測し、縦断的考察を試みた。さらに前回対象被検者のうち80名の1年経過後について、計測および靴着用実態とのかかわりを考察することとした。なお、全778例について足部形状を中心にクラスター分析による分類を試みた。

方法 今回の対象被検者は、当初の月齢16カ月以上24カ月未満の幼児で、前4回の計測をすべて行った者である。その後1年経過時に、足長、足幅、足囲、足高、足首囲および身長、体重を計測した。また、前回のデータを含む全例について、足囲/足長、足高、カウプ示数の3項目を用いてward法によるクラスター分析を行った。

結果 本被検者の計測の結果、足長、足幅、足囲、足首囲は有意に増加したが、そのうち足長および足幅の増加率は、前回の1年間に比べ低下していた。足高では、前回同様有意な変化が認められなかった。全778例を投入したクラスター分析では、デンドログラムの分岐状況から全被検者を3群に分類することができた。足囲/足長、足高、カウプ示数の平均値から第1クラスターは、体格がやや小さく足囲と足長の比は平均的で足高が小さいタイプと考えられ、第2クラスターは、体格が優位で足長に比して足囲が小さく足高が平均的なタイプ、第3クラスターは、体格が平均的で足長に比して足囲が大きく足高が大きいタイプと考えられる。出現率はそれぞれ44.4%、17.5%、38.1%であった。計測時の着用靴サイズでは、前回1年間の平均1.7cm増大に対し、今回は0.95cmの増大であった。